

凍結融解現象を利用した圧密促進工法に関する実験

嘉門雅史・伊藤譲*・片野田栄一**

*摂南大学工学部

**摂南大学大学院工学研究科

要 旨

土の凍結融解現象を利用した鉛直ドレーン工法が提案された。この報告では、まず冷却方法の違いによる効果の違いについて報告する。次に実施工を想定した土槽実験の結果を説明する。これらの実験結果をまとめると、①凍土側はランプ式凍結、未凍土側はステップ式凍結を行うと圧密促進効果が大きい。②冷却温度は低く、凍結時間は長く、繰り返し凍結融解させると効果がさらに増大する。③土槽実験によっても同様の効果が確認された。

キーワード：凍土，凍上，凍結融解，圧密促進，鉛直ドレーン工法

1. はじめに

日本には軟弱地盤が広く分布し、狭い国土を有効利用するためにはこれらの地盤を何らかの手段で改良する必要がある。現在軟弱地盤の改良工法として鉛直ドレーン工法が一般的に用いられている。その中でもサンドドレーン工法（SD 工法）やプラスチックボードドレーン工法（PBD 工法）は代表的なものとして挙げられる。SD 工法は最近の環境問題から透水性の良い砂の入手が困難であることが問題とされている。そこで、近年では砂の代わりに帯状のプラスチックボードを排水材に利用する PBD 工法が利用される例が増加している。しかし、これら鉛直ドレーン工法はそれ自体では強度増加が期待できないためプレロード工法等を併用する必要がある。

本研究は PBD 工法におけるプレロード効果として土が凍結した時に発生する凍上現象に着目したものである。例えば、Chamberlain (1978) は Fig. 1 に見られるように凍結融解した土の間隙比が減少するという報告を行っている。これは土が凍結する時に、凍上が起こり、凍土前面においてサ

クションが発生してアイスレンズが成長する。同時に、未凍土部分では脱水圧密される。そこで鉛直ドレーン工法に凍結融解現象を組み合わせた新圧密促進工法が考えられた。

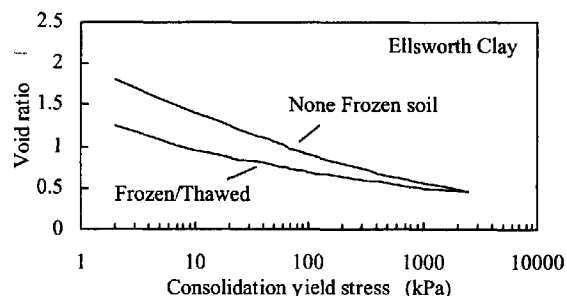


Fig. 1 Characteristics of frozen/thawed soil
(after Chamberlain, 1978)

2. 新圧密促進工法

新圧密促進工法では例えば PBD 材 2 本に 1 本の割合で隣接させて凍結管を打設し、工事の前半では凍結管の周囲の地盤を限定した範囲で凍結させる (Fig.2 (a))。この時シルト分以下の細粒分を含む

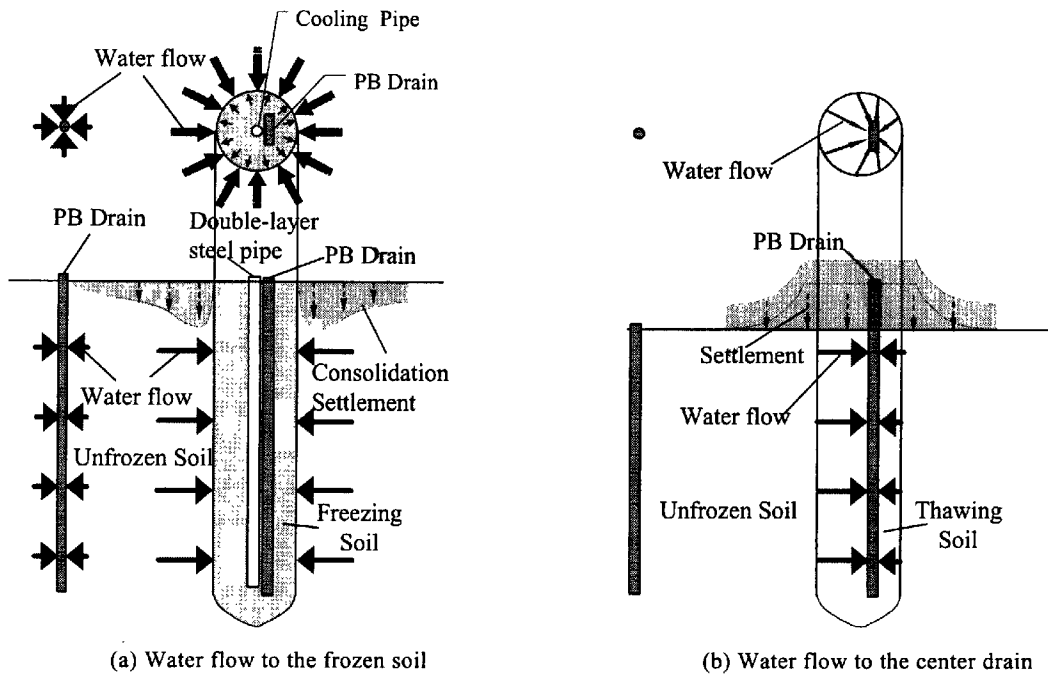


Fig. 2 Image of the new consolidation method

土が凍結作用を受けると、凍結面でアイスレンズが成長する。そして、凍上前面の未凍土部分から水分を連続的に凍上内へ移動させるため、未凍土部分では脱水圧密が生じる。それと同時に、凍土部分ではアイスレンズの成長による含水比の増加が生じる。工事の後半ではこの凍結管に温水を循環させ、凍土の解凍を行うとともに凍結管の回収を行う (Fig.2 (b))。そして、アイスレンズの融解による水分はPBDにより鉛直方向に排水される。

料土を含水比 90%のスラリー状態から 49.8 k Pa まで予圧密し、 $\phi 100\text{mm} \times h80\text{mm}$ に成形した供試体を用いた。

3. 研究目的

本研究では、まず、新圧密促進工法の効果について凍結時の冷却方法の違いについて検討を行ったので報告する。そのため様々な冷却条件で凍結融解させた供試体の圧密特性の変化を調べた。次に、新工法の効果を確認するため、モデル土槽実験を行った。

4. 一次元凍結融解試験

4.1 実験方法

試料土は藤の森粘土 A で、自然乾燥させたものを 0.425mm ふりに通過させたものである。土質試験結果を Table 1 に示す。その土質分類は CH (粘性土) であり、シルト分、粘土分を多く含む土である。また、圧縮指数 $C_c=0.38$ 、圧密係数 $C_v=84 \text{ cm}^2/\text{day}$ 、透水係数 $k \approx 1 \times 10^{-7} \text{ cm/s}$ であり、一般の軟弱地盤と同じような性質である。この試

Table 1 Properties of Fjinomori A soil

ρ_s	(g/cm^3)	2.754
w_L	(%)	51.5
w_P	(%)	28.8
Clay	(%)	28.0
Silt	(%)	71.0
Sand	(%)	1.0
D_{max}	(mm)	0.85

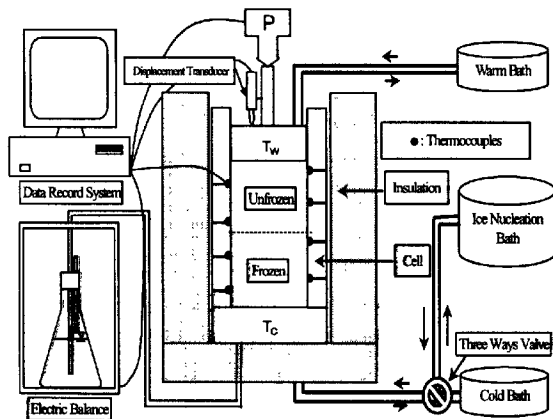


Fig. 3 One dimensional frost heave test system

実験には Fig. 3 に示す凍結融解実験装置を用いた。装置の中央のセルに供試体を設置して、ウォームバス、コールドバスでそれぞれ設定温度に冷却した不凍液を上下部プレートに流すことによって、供試体を凍結融解させた。また、セルの側面には 1.5cm 間隔で $\phi 0.7\text{mm}$ の細孔があいており、熱電対を挿入し実験中の供試体の側面温度を測定した。吸排水された水分は全て電子天秤上のフラスコに集められその重量が測定される。

実験では上載荷重 49.8 kPa で、初期温度 T_w より下部プレート温度 T_c のみを所定温度まで降下させ実験を行い、実験中の T_w , T_c , 側面温度, 変位, 排水量を測定した。融解は 24 時間行った。凍結融解実験後、供試体の含水比分布を測定し、標準圧密試験用サンプルを Fig. 4 のように凍土側と未凍土側より採取した。圧密試験では間隙比 e , 圧密降伏応力 P_c , 圧密係数 C_v , 透水係数 k 等を調べた。

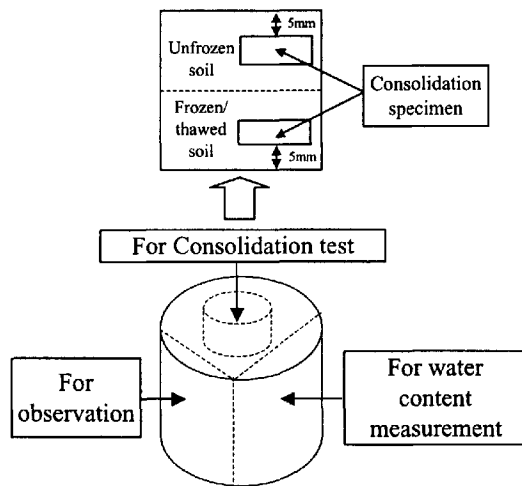


Fig. 4 Sample preparation for consolidation test

4.2 実験条件

凍結融解実験は冷却方法、つまり冷却速度、冷却時間、冷却温度の影響による凍上量、圧密量、融解時の排水量、含水比分布の違いを検討するために行った。実験条件は Table 2 に示す。

シリーズ 1 では冷却速度の影響を調べた。そこで瞬間的に冷却するステップ式凍結 (C1) から冷却速度を変化させ凍結させるランプ式凍結 (C2~4) と比較した。C1 は下部プレートの冷却温度を瞬間的に降下させるステップ式凍結で 24 時間凍結を行った。C2~4 は下部プレートの冷却温度を一定の割合で徐々に降下させるランプ式凍結を行った。C2 は冷却速度を自然凍結に近い -0.1°C/h とし、C3, C4 は C2 の冷却速度を 3 倍, 5 倍にしたものである。

シリーズ 2 はステップ式凍結で行われ、冷却時間、冷却温度の影響を調べた。冷却時間による影響は C5, C11 により比較された。C5 は冷却温度を C1 と同じで、冷却時間は 72 時間とした。さらに、冷却温度による影響は C5~8 で比較された。これらの実験の条件は C5 と同じ積算寒度 ($=T_c \times \text{時間} = 360^\circ\text{C} \cdot \text{h}$) として、冷却温度を -10°C , -3°C に変化させたものである。C11 では C5 と比較して凍結融解の時間を半分にして 2 回繰り返し実施した。

4.3 実験結果

シリーズ 1 の結果を Fig. 5~8 に示す。凍上量 h は、Fig. 5 に示すとおり、冷却速度が大きいほど、その増加も早い傾向が見られた。最終凍上量についてはシリーズ 1 における凍上時間では凍上は継続中であり、特に冷却速度が -0.1°C/h では十分に凍上が終了していない。この原因は土中の水分がゆっくりと冷却されることで過冷却状態になり、液体の状態に残っているためと考えられる。側面温度から計算した最終凍結面の位置 (0°C 高さ) は、Fig. 6 に示すように最終的に 42~48mm 程度であった。

融解時の排水については排水量高さ $h_w = \text{排水量} / \text{供試体断面積}$ で定義した。 h_w は Fig. 7 に示すように冷却速度 -0.1°C/h の時が一番大きく、続いて冷却速度 -0.5°C/h , 冷却速度 -0.3°C/h となった。事前の予想では凍上量最大のステップ試験で h_w が最も大きく、凍上量最小の -0.1°C/h で最も小さいと予想されたが、結果は逆となった。この理由は、冷却速度が速い場合には、水分は凍土中で移動する

Table 2 Summary of test conditions

	Series1				Series2			
	C1	C2	C3	C4	C5	C7	C8	C11
Freezing method	Step	Ramp	Ramp	Ramp	Step	Step	Step	Step
Cooling rate $^\circ\text{C}/\text{hour}$	—	-0.1	-0.5	-0.3	—	—	—	—
T_w $^\circ\text{C}$	+5	+5	+5	+5	+5	+3	+10	+5
T_c $^\circ\text{C}$	-5	-0.2~-5	-0.2~-5	-0.2~-5	-5	-3	-10	-5
Freezing time hour	24	72	34	40	72	120	36	36×2
Freezing index $^\circ\text{C} \cdot \text{hour}$	120	240	145	160	360	360	360	360
Thawing time hour	24	24	24	24	24	24	24	12×2

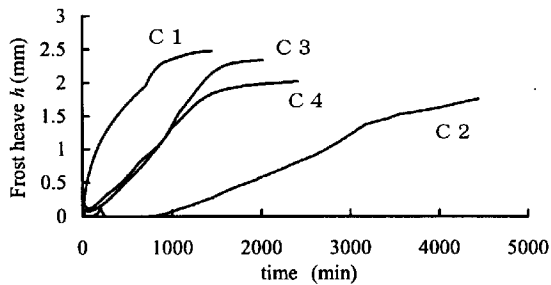


Fig. 5 Frost heave (Series1)

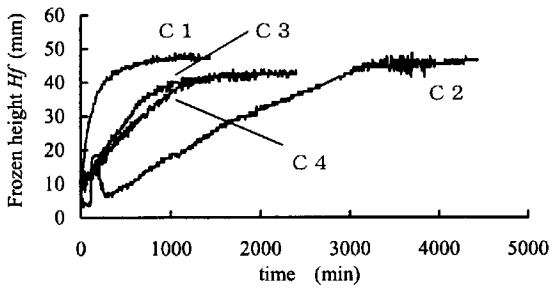


Fig. 6 Location of 0°C (Series1)

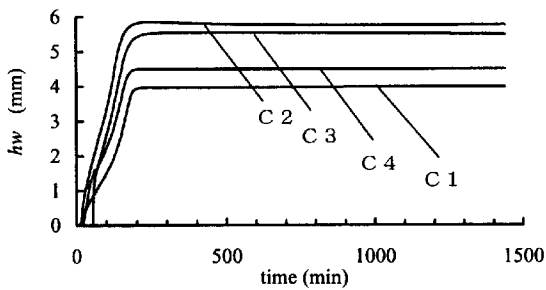


Fig. 7 Outflow in the thawing stage (Series1)

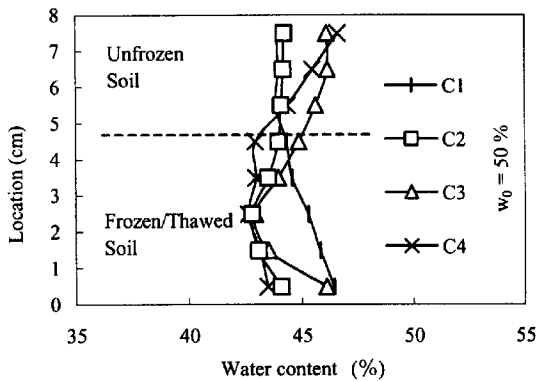


Fig. 8 Water content after the test (Series1)

ことなく、凍結するが、冷却速度が遅い場合は水分が移動しアイスレンズを形成して凍結するためと思われる。つまり、見かけの凍上量（凍結水量）が多くても水分移動することなく凍結した場合には、排水され難く、圧密促進されないということを

意味する。Fig. 8に試験終了後の含水比分布を示す。凍土側については、冷却速度が比較的小さい実験では数多くのアイスレンズ形成の作用が強く働いたと見られ、その結果含水比が大幅に減少している。特に冷却面から2~3cm当たりでの含水比の低下は、この部分での脱水圧密の作用が強い、つまり数多くのアイスレンズの存在を意味する。

このようにシリーズ1において、凍土側ではランプ式、未凍土側ではステップ式の冷却方法が圧密効果が大きかった。また、凍結時間を長くしたり、冷却温度を低くすると凍上量が増加し、排水量（圧密量）も増加すると考えられた。

シリーズ2では、まず $T_w/T_c = +5/-5^\circ\text{C}$ のステップ試験について凍結時間を長くした実験（C1を基準）を行うことにした。さらに積算寒度一定で冷却温度を変化させた実験を行った。

シリーズ2の結果は Fig. 9~12に示す。凍上量 h は Fig. 9に見られるように、 $T_c = -3^\circ\text{C}$ (C7)では凍上量は小さく、またシリーズ1のC2と同じように試験時間内には収束しなかった。また、繰り返し試験では1回目と2回目で同様の凍上量となった。全体的に凍上量は2.6~2.9mmの間であった。 $T_c = -3^\circ\text{C}$ の場合に凍上がゆっくり進行するのは冷却温度が他のケースに比べて高く、間隙水の凍結が遅れているためと思われる。また0°C高さは Fig. 10に示すように、シリーズ1のC1と同様であり、ほぼ47~51mmで落ち着いている。

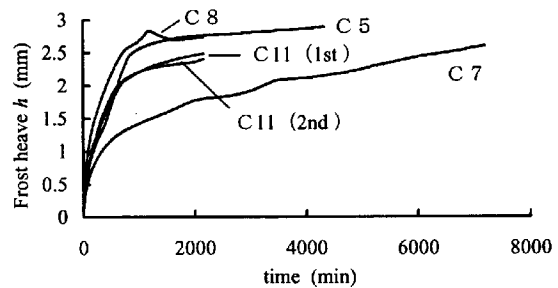


Fig. 9 Frost heave (Serie2)

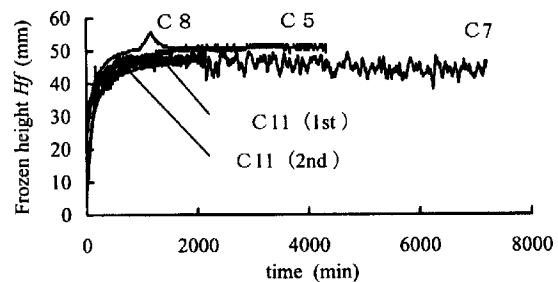


Fig. 10 Location of 0°C (Serie2)

排水量高さ h_w については、Fig. 11 に示すように、シリーズ 1 と同様に凍上量との関係を見出すことはできない。しかし、シリーズ 1 の C1 とシリーズ 2 の C5 を比較すると、ステップ式においても凍結時間を長くすることによって多く排水されるようである。また、C5 と C11 を比較すると、凍結融解時間の合計が同じでも繰り返し凍結融解した方が排水量高さ h_w の合計が大きくなることがわかる。

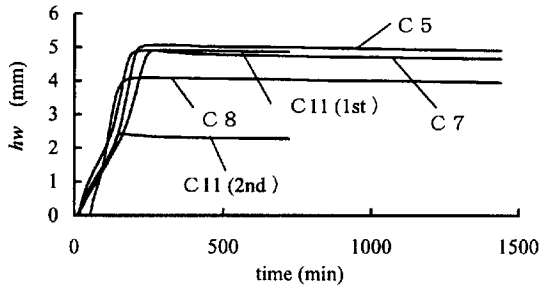


Fig. 11 Outflow in the thawing stage (Series2)

試験後の含水比分布を Fig. 12 に示す。冷却面（排水方向）に近い凍土側では、排水面に近いにも係らず含水比の低下は比較的少ない。これに対して、凍土側でもアイスレンズのある付近、そして未凍土側にかけては大幅な含水比低下が生じている。これは、実験の初期に凍結面が最終アイスレンズ付近まで跳び、その間の凍土中の水分は移動することなく凍結したためと思われる。そして未凍土は長時間の脱水圧密作用を受けたためと考えられる。

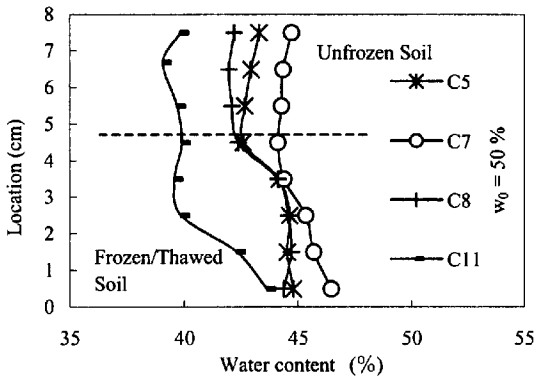


Fig. 12 Water content after the test (Series2)

シリーズ 1 とシリーズ 2 を比較する。凍上量 h は凍結時間を一定にすれば冷却温度が低い方が大きく、冷却温度を一定にすれば凍結時間の長い方が大きい。また、C1, C5, C8 と C11 の凍上量のグラフがほぼ一致していることは今回の冷却温度の範囲では最終的に凍結する水分量がほぼ等しいということである。Fig. 13 は排水量高さ h_w については凍結水量 $H_{wf} = \text{凍上量} / 1.09$ で比較した。この Fig. 13 より、凍結した水量の全てが排水されてはいないこ

とが解かる。また、排水量はランプ式凍結 (C2, C3, C4) の方が、ステップ式 (C1, C5, C7, C8, C11) よりも少ないことから、工事の初期の冷却方法は、ランプ式にするべきと考えられる。

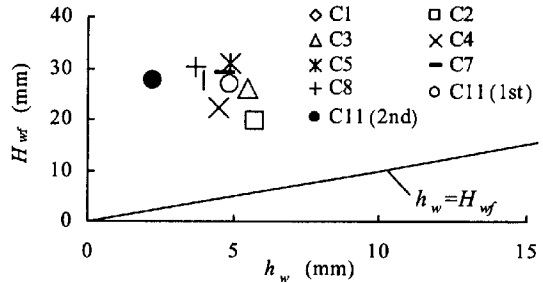


Fig. 13 Relationship between H_{wf} and h_w

Fig. 14 にシリーズ 1 と 2 の含水比分布をまとめた。シリーズ 1 のまとめとして、ランプ式凍結ではステップ式と比較して凍上側の含水比の低下が激しいとされた (Fig. 8)。ところがシリーズ 2 よりステップ式においても冷却温度が低く、長時間凍結させると凍土側の含水比が低下することが明らかになった (Fig. 14)。全体的に未凍土側では凍土側より脱水効果が大きいようである。これは、凍土部分ではアイスレンズの融解による吸水膨張の影響が大きいためと考えられる。

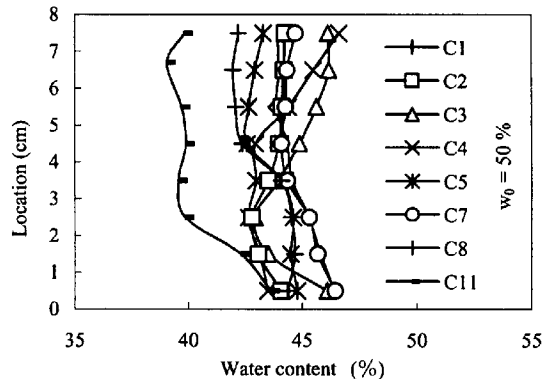


Fig. 14 Water content after the test

4.4 圧密試験結果

凍結融解過程後に凍土と未凍土の部分により標準圧密試験料を採取して圧密試験を行った。その結果を Fig. 15, 16 に示す。まず、Fig. 15 より、凍結融解試験後の透水係数は、一部を除いて、凍土と未凍土両方で、凍結融解を行わなかったものより 5~10 倍大きくなっていることが解かる。

次に、 $e-\log P$ 曲線から三笠法により求めた圧密降伏応力を Fig. 16 に示す。ランプ試験では、未凍土側に比べて凍土側の方が圧密降伏応力の値は大

90%を確認後、凍結融解を行った。土槽の中心の凍結パイプにより中心から外側へ凍結させ、土圧、間隙水圧等を測定した。また供試体からの排水は中央2カ所、外側4カ所から行った。実験終了後は上部から試料を4断面に分け、各断面における含水比を中心から外側に向かって測定した。

Table 3 Properties of Fjinomori B soil

ρ_s	(g/cm ³)	2.678
w_L	(%)	61.5
w_P	(%)	31.0
I_P	(%)	30.5
Clay	(%)	29.0
Silt	(%)	69.8
Sand	(%)	1.2
D_{max}	(mm)	0.425

Table 4 Summary of model test

Initial water content	(%)	55.1
Freezing temperature	(°C)	-22→-24.5
Freezing time	(h)	287
Thawing temperature	(°C)	+40
Thawing time	(h)	68

5.2 実験結果

実験結果を Fig. 18~22 に示す。実験中の内部温度の変化を Fig. 18 に示す。土圧の変化は Fig. 19 に示すように、凍土側と側面の土圧が一定に増加しているに対し、未凍土側の土圧の変化はあまり見られない。Fig. 20 に示す間隙水圧の変化は土圧ほどの増加は見られず、凍土、未凍土側での差も見られない。これは凍土域にある土圧計①は凍結の影響を受けたが、土圧計②は未凍土域にあるため、凍結による圧力を受けなかったためと考えられる。側面土圧の増加については、土槽の中心から外側に向かって凍結させているため凍土の成長が水平方向に進み、それに伴い水平方向の土圧も増加したと考えられる。融解時に土圧計②が凍結前に戻ったのに対して土圧計①（凍結側）と③（側面）は負の値を示している。これは凍土側で凍結時に成長したアイスレンズが融解時に、泥濘化が起こったためと考えられる。

土槽実験後の含水比分布を Fig. 21 に示す。凍結面（中心より約 14 cm）を境界として外側の未凍土部分において含水比の大幅な低下が見られる。これらは、凍結融解によって脱水圧密されたためと考えられる。

土槽実験後の圧密試験による圧密降伏応力を Fig. 22 に示す。未凍土側では 180kPa 以上の圧密降伏応力の増加が見られた。土槽実験の凍土側については泥濘化が起こっていたため圧密試料の採取が不可能で、圧密試験を行える状態でなかった。

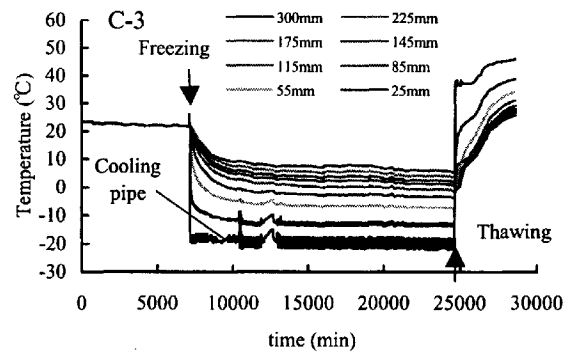


Fig. 18 Temperature distribution

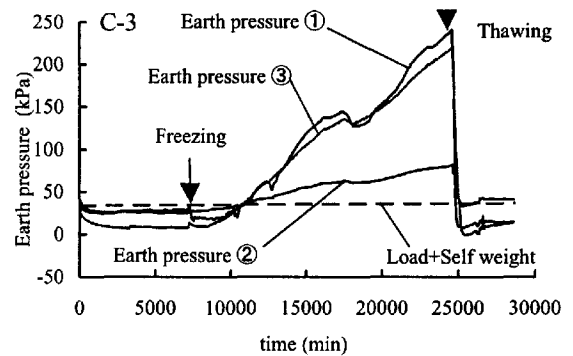


Fig. 19 Earth pressure

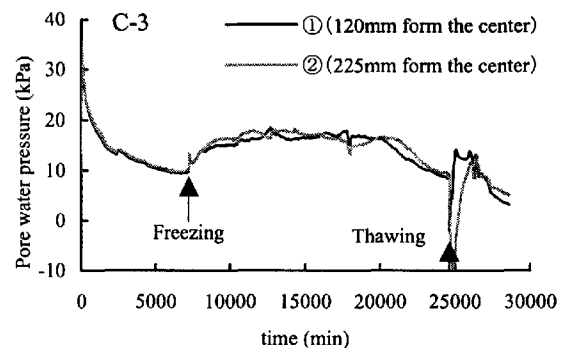


Fig. 20 Pore water pressure

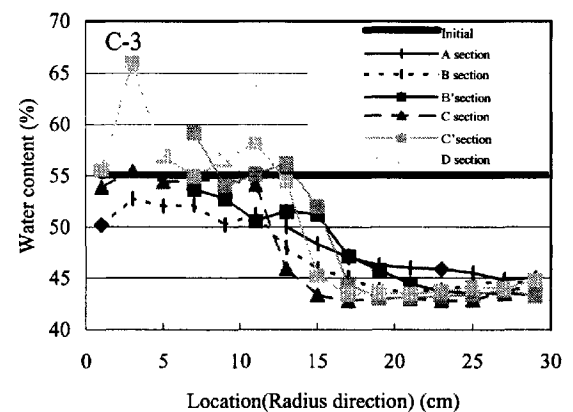


Fig. 21 Water content after the model test

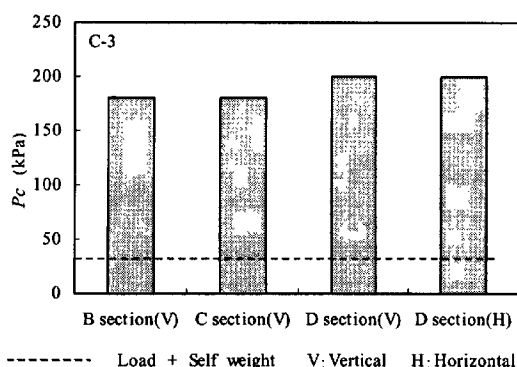


Fig. 22 Comparison of P_c

次に、実験後の一軸圧縮強度を調べたところ 87.8kN/m^2 の値を得た。今回実験に使用した藤の森粘土 B は強度増加率 cu/p が塑性指数によると $0.2\sim 0.25$ と予想されたため、ほぼ妥当な値と考えられる。

6. まとめ

凍結融解現象を利用した新圧密促進工法の効果を一次元凍結融解試験と土槽実験により検討を行った。その結果以下のことが明らかとなった。

- 1) 凍土側は初期の冷却速度が遅い方（ランプ式）が、数多くのアイスレンズが発生するため、含水比の低下も大きく、圧密降伏応力の値も大きくなる。
- 2) 未凍土側はステップ式が含水比の低下はより大きく、圧密降伏応力の値も大きくなる。
- 3) 全体的に冷却温度は低く、凍結時間は長く、また繰り返し凍結融解させるほど脱水圧密効果がある。今回の実験では圧密促進効果は圧密降伏応力 P_c で評価すると $100\sim 200\text{kPa}$ であった。

Experimental study on a New Consolidation Method Using Freezing and Thawing Effect

Masashi KAMON, Yuzuru ITO*, Eiichi KATANODA**

*Setsunan University

**Setsunan University Graduate School

Synopsis

This paper introduces a new vertical drain method using ice segregation phenomenon of cohesive soils. Two experiment results were presented to demonstrate the effectiveness of the new method. The first experiment investigates the influence of the rate of temperature decrease of the freezing pipe on consolidation. The test results showed that the slower cooling rate generally decrease water content of the soil, hence an increase in P_c . Further, when the longer cooling period was adopted with faster freezing method, the greater consolidation effect was also observed. In addition, a similar effect was observed in the second model experiment.

Keywords : freezing soil, frost heave, freezing and thawing, consolidation, vertical drain method

4) 土槽実験では、全体の体積の約 8 割を占める未凍土部分では一次元凍結融解試験からも予想されたように、脱水圧密効果が確認された。

5) 今後の課題として、①一次元凍結融解試験により、様々な土質について効果を確認すること、②土槽実験装置の問題点を克服し、実験データの充実をはかること、などを予定している。

謝 辞

本研究を遂行するにあたり協力していただいた錦城護謨株式会社、株式会社精研に心よりお礼申し上げます。

参考文献

- 片野田 栄一・伊藤 譲・嘉門 雅史・野村 忠明 (2000) : 凍結融解現象を利用した新圧密促進工法, 第 4 回地盤改良シンポジウム発表論文集, pp.175~182.
- 広瀬 剛・伊藤 譲・片野田 栄一 (2000) : 凍結融解土の圧密特性の変化について, 土木学会第 55 回年次学術講演会, III-B356.
- Chamberlain, E.J.and.A. J. Gow (1978) : Effect of freezing and thawing on the permeability and structure of soils, *Engineering Geology*, Vol.13, pp.73~92.
- Ito, Y., Kamon, M., Nomura, T., Izuta, H. and Katanoda, E. (2001) : A New Consolidation Method Using Freezing and Thawing Effect, *International Symposia on Materials Science*. pp.13~16.